

論文題名・副題	職業選択過程にある若者のライフストーリー ——「後期近代」がもたらす「むなしさ」の経験的プロセス
主査教員名	松本 誠一 先生
研究科・専攻・学年・学籍番号	福祉社会デザイン研究科 福祉社会システム専攻
氏名	村上 天悠

1. 研究背景と目的

「後期近代」では「個人化」によってリスクが直接個人にふりかかるようになったため、人々に「生き辛さ」が表出するようになったと論じられている〔渡辺編 2016〕。職業選択過程にある若者についてはどうかといえば、青年期の若者が職業を中心に自己を再構築しなければならないこと、その体験が緊張に溢れるものであることは、これまでも述べられてきたことである。しかし、「後期近代」における特徴的な問題とは、彼らがいくつもの開かれた可能性の中で思い悩んでしまうということであった。近年書かれた新聞記事を参照すると、こうした状況の中で、彼らはどのような選択をしたら良いのかに不安や悩みを抱いていること、そうした悩みが時には自殺に帰結してしまうことが書かれていた。以上のことから、職業選択課程にある若者もなんらかの「生き辛さ」を抱えているという現状が伺えるが、こうした経験的プロセスを明らかにした研究は見受けられなかった。

そこで分析概念として、若者が抱く社会に対する職業的な自己の位置づけ辛さとでも呼ぶべき漠然とした悩みや不安を、先行研究に倣い「むなしさ」〔堤 1995, 諸富 1997〕と定義した。以上の経緯を経て本研究の目的を、「後期近代」を生きる若者が職業選択過程において行う再帰的な自己の構築を継続的に追うことで、そこに表出される「むなしさ」の経験的プロセスを明らかにすることと設定した。

2. 研究方法

再帰的な自己の構築を継続的に追うため、近年多くの研究者が「自己とは自己についての自己物語である」と一様に指摘していることを参考に、インタビューで自己についての物語を聞き取るライフストーリー研究法を採用した。調査対象は就職活動期にある大学3年生3名であり、2015年10月にプレ調査を各1回行った。2016年2月に東洋大学福祉社会デザイン研究科研究等倫理審査委員会の承認を経て、2016年4月、7月、10月と大学4年生に進学した調査対象者に対し、各3回本調査を追加で行った。計各4回にわたる継続的な非構造化インタビューであった。

トランスクリプトの分析には、ライフストーリーをインタビューの場における対話的混合体と捉える対話的構築主義アプローチ〔桜井 2002〕を採用した。これにより、ライフストーリーの「語られ方」や、ライフストーリーを構築する主体の一人である調査者の有する「構え」についての分析が可能となった。

3. 先行研究

「後期近代」における職業選択過程変容に関する先行研究を概観した。着目すべきは、「後期近代」では社会構造の変容によって、若者の自己までもが変容させられている点であった。

若者の職業選択過程変容は、景気後退を引き金とした労働市場変容によって引き起こされ、学

業から労働への移行過程は次第に長期化、複雑化した。また、移行過程の不安定化に伴い、若者の自己の確立も困難となった。それにもかかわらず、若者たちには個人レベルで様々な問題と向き合いつつも自己を確立していかなければならないという「認識論的誤謬」が存在していた〔Furlong 1997〕。この「認識論的誤謬」によって、若者は「自己実現」に主眼を置いた職業選択を行う傾向があること、それに向けた再帰的な自己の構築を要請されているという状況を整理できた。

4. ライフストーリー事例と分析・考察

対話的構築主義アプローチに依拠し、まずは筆者がライフストーリー研究法を採用し、インタビューに持ち込んだ「構え」¹⁾についての自省的な再考を行った。筆者が有していた「構え」とは、「後期近代」論者が指摘する問題点と同様に、調査対象者に対し再帰的な自己の構築を要請し続けるというものであった。こうした認識論的問題に立ち返り、「語られ方」に着目した分析を行うことで、調査対象者らは筆者からの要請に応え、様々な語り方の戦略を用いてライフストーリーを構築していたという考察が可能となった。

さらに調査対象者の通時的な変化に着目した分析を行うと、調査対象者がそれぞれに構築したライフストーリーが、職業選択と自己を同一視して考えようとする筆者の構えに対し、それを当然のことに受け入れて対話する「呼応する生」にある者。そして、筆者の問いかけに合わせてなんとか自己物語を表出しようとする「適応する生」にある者。また、次第に職業選択と自己について一貫した物語を構築することに抵抗を示す「乖離する生」にある者に分類することができた。「認識論的誤謬」によって職業選択と自己を同一視しながら一貫した自己物語を構築しようとする「呼応する生」にあった者、筆者の有するそうした「構え」に「適応する生」にあった者は、職業選択において一貫した自己を見出すことができない際に、「むなしさ」を表出した。その経験的プロセスとは、生きる意味への懐疑とも呼ぶべき内容であった。ところが、こうした「むなしさ」をすべての調査対象者が表出したわけではなかった。「乖離する生」にあった者は、筆者が有していた職業選択と自己を同一視するような考え方を頑なに拒んだため、ライフストーリー内に職業選択と関連した「むなしさ」が表出されることはなかった。

5. 結論

先行研究で指摘されるように、「後期近代」を生きる職業選択過程にある若者が、再帰的自己を構築しながら「自己実現」に主眼を置いた職業選択を行おうとしている姿を本調査から確認することができた。しかし、職業選択過程において表出される「むなしさ」とは、決して若者共通の普遍的なものではなく、職業選択と自己をどれだけ関連させて考えるかという程度に関係していた。その高まりによっては職業選択が上手くいかない際に、自身の生きる意味について懐疑を抱くような意味世界を構築しかねないことを本研究によって示唆することができた。

本研究では「むなしさ」の経験的プロセスについての深い考察を行うために、対象を就職活動期間にある大学生に絞った調査を行った。調査対象者らは、四年制大学に通い、ある程度自身の将来について思い悩むことが許された経済的余裕のある人々だったと説明することができるだろう。そのため結論としては、自己論的な内容を示唆するまでに留まった。他のライフステージにある人々や、階層を絞った調査を行えば、また異なる研究結果が出ると推測できる。

今後の課題として、他のライフステージへの着目や階層的な部分にも視野を拡げた研究を行っ

ていきたい。

引用文献

- 渡辺秀樹編, 2016, 『社会学評論』, 264, 有斐閣.
- 堤雅雄, 1995, 「むなしさ——青年期の実存的空虚感に関する発達的一研究」, 『社会心理学研究』, 10(2):95-103
- 諸富祥彦, 1997, 『<むなしさ>の心理学』, 講談社.
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』, せりか書房.
- Furlong, Andy. Fred Cartmel, 1997, *Young People and Social Change (Second Edition)*, Open University Press, UK. (=乾彰夫・西村貴之・平塚眞樹・丸井妙子訳, 2009, 『若者と社会変容——リスク社会を生きる』, 大月書店.)

【注】

- 1) 調査者が調査対象者の語りを聞く際に、予め持っていた枠組みのこと〔桜井 2002:119〕。